

大城 かん奈



丸



角



ツユ

【クラッシュクォーツ】

大城 かん奈

大城は、制作の前提として、正確なカットは勿論のこと、手摺りでないといけない表現を探っている。職人の目線から手摺り研磨の利点を探っていかないと、いずれファセッター研磨に置き換わってしまうか、過去の技術として葬られてしまうという危機感を抱いているからだ。それ故に「手摺りならではの」表現としての『クラッシュクォーツ』。

人工水晶を加熱急冷してクラック(ひび)を入れ、クラックのない人工水晶と接合し、再研磨している。クラックの入ったデリケートな状態で研磨するため、振動など石にかかる負担の少ない手摺りの技術を活かした作品といえる。

【サイズ】

角: 15mm
丸: 16.5mm
ツユ: 20mm × 14mm

【素材】

人工水晶

Twitter

@shimizu_kiseki

Facebook

<https://www.facebook.com/shimizukisekikk>

instagram

shimizu_kiseki

Home Page

<https://www.s-kiseki.co.jp/>



craftsman jewelry file.23

kanna oshiro

2021 June

craftsman jewelry

Vol. 23

2021年6月発行

Introduction of works



山梨ジュエリーミュージアム

山梨県甲府市丸の内1-6-1 山梨県防災新館1階

<https://www.pref.yamanashi.jp/yjm/>

開館時間: 10:00~17:30(最終入館17:00)

休館日: 火曜日(祝日の場合はその翌日)、年末年始、その他、臨時に開館・休館することがあります。

入館料: 無料

駐車場: 92台 山梨県防災新館地下有料駐車場

(来館者は1時間無料)

回り道をしなくてもすべての仕事につながっている

静岡で生まれ育ち、映画製作の小道具係として働いていた大城がジュエリーに興味を持ったのは、登場する指輪などを借り受けて、職人の工房へ出向いた時だった。映画のシーンに合わせ、ジュエリーそのものの制作から傷を施す加工まで、きめ細かく対応する様子に「すごいな、格好いいな」と思ったのだという。

その後不規則な仕事で体を壊して実家に戻った大城は、これを転機と前向きに捉え、地元の彫金教室に通ったことをきっかけにジュエリー制作に方向を定めた。

一生の仕事の足掛かりにしようと入学した山梨県立宝石美術専門学校では「こんなに一生懸命になれることがあるのか」と思うほど学業にのめり込んだ。社会人になってから入学したという年齢に対しての焦りや、地元を離れての挑戦という事もあり、今度こそものにしてくては、という思いも強かった。

産地ブランドでもあるKoo-fuコレクションにも学生として参加。積極的かつ貪欲に学ぶ2年間を過ごした(同校は2014年度まで二年制、翌年度より三年制)。

卒業後業界において経験を重ねるなか縁あって、宝石研磨を専門とする株式会社シミズ貴石に入社。貴金属を中心に学んできた大城にとっては挑戦でもあったが、改めて研磨作業を「楽しい」と実感したことが宝石研磨の世界に飛び込む大きな原動力になった。

入社から7年。常に時代を読み、事業展開をしてきたシミズ貴石にとって、今や大城の存在は欠かせない。シミズ貴石は手摺り研磨(角度などを決める治具などの器械を使用せず、指先の感覚のみで宝石を研磨する手法)とファセッター研磨(治具を使用した研磨)で様々な宝石を研磨しており、大城は受注に沿った手摺りの仕事がメインではあるが、現在は広報も中心となって担当している。そこには学生時代に映画製作のために学んだ映像や画像編集の技術も活かされ、今ではすべての経験が繋がっていると感じている。会社の紹介ができれば、と始めたSNSを介したB2Cは、いまやシミズ貴石の事業の一つの柱となった。

じっくり商品確認ができ、併せて文字情報も伝えられるSNSは「ジュエリー」にとって有効なPRの手段のひとつである。大城は魅力ある自社製品をより多くの人に知ってもらえるよう様々な工夫を重ねながら業務に取り組んでいる。



大城 かん奈 (おおしろ かな)

宝石研磨士

株式会社 シミズ貴石
甲府市高畑1丁目13-18
Tel:055-228-1180



美しい宝石をうみ出し、
伝統とともに受け継がれていく、
技術をつないでいく、

自主制作は会社があつてこそ

今やアートフェアで自主制作のオブジェやルース(裸石)が注目される大城だが、自主制作は、業務で得た切片から心惹かれる石を拾い上げ、手摺りの練習を繰り返したことがきっかけだった。

仕事ではインクルージョン(内包物)やクラック(ひび)、色むらのない部分などを選び、使用する。しかし使用されなかった部分にもその石それぞれ独特の表情がある。その魅力を引き出そうと、大城は手摺りの練習として研磨し、磨き上げたルースの写真をSNSにあげていた。やがてその写真を見たギャラリーの関係者などから声が掛かり、現在の制作活動につながっているのだ。

自身の制作は「会社での業務があり、そのうえで成り立っているもの」という意識が強い大城は、日常の業務で得た経験と、みずみずしい感性で手摺りならではの作品づくりに取り組んでいる。

技術をつないでいく

大城が師匠と仰ぐ社長の清水幸雄は、常に研鑽を積み、兄と会社を盛り立てながら後進の育成にも力を注いできた。大城にとっては専門学校時代の恩師であり、厳しい目を持つ雲の上の存在だった。今でもその思いは変わらないが、加えて「少しでも近づきたい。いつか肩を並べたい」という目標にもなった。

清水は「自由に仕事をさせることが本人の成長にもつながり、ひいては会社、業界のためになる」と弟子の仕事ぶりを見守る。かつては大勢いた手摺りの職人だが、今では数えるほどしかおらず、女性の職人は大城ひとりではないかという。

どうしても業務に忙殺されてしまう中、1日2時間でも手摺り研磨の練習をしてほしい、と伝えてはいるが、なかなか難しい。それでも休日や時間外に「自主制作」という形で研磨台に向かう大城を見て、頼もしく思う。

今では清水に「仕上げの磨きに関しては、俺より上手いんじゃないか」と言わしめるほど大城の成長は目覚ましい。「修行を積んで、手摺りの技術を極めてほしい。そのために会社としてもバックアップしていきたい」と大城に期待を掛けている。

手摺り研磨で宝石の魅力を伝えたい

かつての大城は「宝石とは、一定の決まった形のきらきらしたもの」だけだと思っていた。しかし視野を広げるともっと自由な石の世界、様々な表情や形、輝きかたをする宝石の世界がある。そのことを沢山の人の人知ってほしい。

「自分なりに山梨・甲府の伝統技術である手摺りの技法を使い、宝石の表現の幅広さ、面白さを知ってもらえたら」という強い気持ちを持ち、大城は日々研磨台と向き合っている。

仕事の精度をあげ、クライアントの要望に応えるのはもちろんのこと、素敵な作品を生み出し、その裏付けとしての手摺りを、歴史などの背景を含めて紹介していきたい。

手摺りの技術が失われないように、次の世代に繋げていけるように。長い目で会社と業界を見続けてきた師匠の背中を追いながら、大城もまたバトンを渡せるように日々努力を惜しまない。

